

松江いなさ

題字揮毫 千家達彦 (元いなさ会最高顧問)

写真提供 板垣 宏 (写真家・高校7期) 表紙写真: 参道の番内の群れ

第33号

変わりゆくふるさと大社町

会長 江口 博 晴 (高校十期)



昨年末、ひさしぶりに神門通りと出雲大社周辺を散策した。

ちょうど晴天の日曜日ではあったが、コロナ禍の中とはいえ神門通りは結構な人通りである。十年ほど前の平成の大遷宮以前には閑静な、いやいささか寂しい通りであったのだが、今はその様子を思い出すことも難しい。かつての賑わいを取り戻したようだ、などと思いつつあたりを見渡すと、しかし知った店がほとんどない。

よく行ったラーメン屋さんや本屋さんに替わって全く知らないお店が並び、若い人たちが群がっている。

勢溜の近くにあった大きな土産物屋さんも今はなく、小さな商店街ができています。ああ、これがご縁横丁だなど入ってみるといろいろなお店があり、やはり若い人がたくさんいる。勢溜前の道路は広くなり、昔の面影はない。いや思い出せない。

神苑を横目に見ながら進むと大社だ。拝殿は目になじんでいるし八足門、ご本殿は昔のままだが境内も周辺も変わったなあと思う。

遷宮は神様が清新に若々しく蘇ること、蘇生再誕といわれるが、蘇生再誕するのは神様だけではない。遷宮で新しい力が生まれ、この町、そしてここに住む人々、縁を持つ人々も生まれ変わる。遷宮のたびにこのようなことが繰り返されてきたのではないか。

昭和の遷宮のころ、私が社高に通っていたころであるが、あのころも大変な賑わいであった。遷宮に合わせて開催された「神国博覧会」は、社高九期の廣澤將城先生によれば「不便な山陰の地に（中略）中央の文化・文明の一端を持ち込んだ画期的な催し」であった。（※注）全く同感である。この地に関心を持った方も多くなったことだろう。

平成の大遷宮を終えた現在の大社の町が、若い人や子供たちにとっては原風景となり、また新しい大社の町が歩き出す。歴史は繰り返さないが韻をよく踏むともいう。美しい韻を響かせてほしいものだ。

（※注）『出雲大社の造営遷宮と地域社会』（下巻）いづも財団 出雲大社御遷宮奉賛会 編

素晴らしいボーイスカウト活動

奥村 俊介さんの取り組み

(高校十八期)

私はボーイスカウト松江第一分団に所属し、指導者として奉仕しています。きっかけは長男が入隊した折、指導者講習会主任講師の浅野和也氏（高校6期。元・松江高専教授）に勧められたことです。そもそもスカウトとは、「生きる力、術を身につけて社会に役立つ人間になろうとしている子供達」のことで、野営（キャンプ）などの野外活動を通じて生活技術を、班活動により協調性や礼儀、指導力を養います。また募金活動や街頭清掃も行ない、社会奉仕の精神を育みます。

訓練の成果を大いに発揮するのが四年ごとに開催される全国大会「日本スカウトジャンボリー」で、参加者は二万人です。

世界大会も四年毎に開催されます。私は平成十九年夏、ボーイスカウト発祥の地イギリスで開催された第二十一回世界スカウトジャンボリーに参加しました。心もとなない英語力を振り絞って世界の仲間たちとワッペンや制服等の交換に夢中になったり、食事交換会に参加し、一生懸命に話しかけるスカウトをたくさん見ることが出来、こみ上げるものがありました。アメリカボーイスカウトの最高位章であるイーグル章のついた制服を獲得したスカウトがいたのは驚きでした。また、日本隊のよさこいソーラン踊りの懸命さに外国スカ

ウトは熱く感動し、大勢がキャンプサイトに訪れ、対応に嬉しい悲鳴を上げました。

この大会の時の、今も印象に残っているエピソードを二つ紹介します。一つは一日目の式の後、キャンプサイトへ帰る際に最年少の隊員が班とはぐれてしまいました。が、班長や次長の機転で発見でき、無事に連れて帰ることが出来ました。ホッと胸をなでおろすとともに、スカウトの基礎であり、平素から心掛けていたパトロールシステム（班制度）が有効に作用したことに大いに感銘を受けました。

もう一つは、会期後半ではイギリスのスカウトの家庭でのホームステイがあり、私は一人で三日間過ごしました。私のほとんどがメな英語に先方は大変だったと思いますが、心からのもてなしでイギリスの自然、歴史、文化に触れられて、大変貴重な体験することが出来ました。イギリスの新聞「デイリーエクスプレス」に掲載された開会式の写真でウイリアム王子（ダイアナ妃の長男）が入場する写真の中に、偶然にも私も写っていて、その新聞をホームステイ先の方からいただいたのも記念になりました。（右下の写真）



平成二十七年には第二十三回世界スカウトジャンボリーが山口県で開催され、この時にはイギリス隊の隊長一人にわが家でホームステイしていただきました。この隊長は日本での就労体験があり、和食OKでしたが日本語に堪能というわけではありませんでしたが、幸いにも長男の妻が通訳してくれて助かりました。ボーイスカウト活動には家族の理解と協力が欠かせませんがそれを再認識しました。

ボーイスカウト活動は、未来の日本及び世界を担う子供達が、自分が身を置く社会や組織との関わり方を経験できる素晴らしい活動であると自負しています。

松江で活躍する

大社高校OB訪問記

生活協同組合しまね 理事長

安井 光夫 氏

(高校二十九期)

それにしてもコロナ、コロナの大合唱・アメリカのオールスターゲームでは超満員の観客がマスクもしないで二刀流の大谷翔平選手を応援しているというのに、ひっそりとした松江市内の夜の繁華街はこの先どうなるん



だろうと心配になります。そんな混乱の中にあって業績を向上させているのはネット通販業者だけかと思えば、生協しまねもその代表格なのだそうです。今回はいなさ会二十九期の生協しまね理事長の安井光夫さんを訪ねて来ました。大社に帰れば同級生の友達、いなさ会の北島建孝会長さんらともよく集まるのだそうです。

それにしてもどうして生協しまねが業績を伸ばしているのかと聞けば「結局みんな集まりたいんですよ。人混みのある場所には出ていけないけどコープの車のメロディが町内に響けばみんな集まって近所話に花が咲きます」なるほどなるほど。「週一回の決まった同じ時間での配達で、近所所の皆さん、同じ職場の皆さんが顔を合わせる場になっていきます」そうですか、地域の人にとってそこはちょうどよいサイズのデパートのようなものなんですね。「はい、採算は取れないですけど隠岐の島にもコープの車を走らせていきます」いやその意気込みは大したものですよ。

生協の誕生の中心となった人物といえば、大正・昭和期のキリスト教社会運動家の賀川豊彦を思い浮かべますが、島根県ではいつ設立されたのかと聞けば、全国でも高知、新潟、島根しか残っていない遅い時期、1981年に事業を開始したとのことで、それ以前の準備の時期を含めて実質的にも生協しまねの創設者は安井さんだったようです。大変なご苦



労があったでしょうね。2018年にはその功労によって厚生労働大臣表彰も受けられました。

最後に質問をひとつだけ、ウィズコロナの時代にネット通販に負けないような仕掛けはどうなさっていくんでしょう。「はい、私たちは島根の地域の商材開発も心がけています。そして何よりも私達には商材選びの厳しい基準があり、それがネット通販には無い私達組合員の信頼基盤となっているという自信があります」と充実したカタログを見せていただきました。いや素晴らしいです！

いなさ会OB、安井光夫さんのますますのご活躍に期待しています。

(文責 今岡)

● 大社町の昔と今 ●

和田 節子氏

(高校十七期 いなさ会副会長)

大社町神門通りで生まれ育ち、縁あって町内に嫁いでこの地で暮らして七十余年。県職員を定年退職してから、「出雲大社かたりべガイド」として全国から訪れる参拝客のご案内をさせていただいています。この間に気づいた大社の変遷について紹介したいと思います。

一 神門通りの変遷

〽元の賑わいが戻ってきたのは〽

出雲大社の参詣道である神門通りは明治四十五年の国鉄大社駅の開業を受けて整備されて、旅館、土産品店等が立ち並び、多くの参拝客で賑わっていました。しかし昭和四十年代に入ってから車時代の到来と平成二年のＪＲ大社線の廃止の影響を受けて、参拝客の動線が変わり、次第に歩行者が少なくなつて、空き店舗が目立つようになつていました。私が平成十九年三月に退職した時には神門通りは人通りがなく閑散

として、介護関係の車しか走っていないかつたという印象が残っています。

しかしそうした中、平成二十五年に六十年に一度の出雲大社の「平成の大遷宮」が斎行されるのをチャンスと捉えて、「神門通り」を出雲大社の門前町にふさわしい風格と賑わいのある通りとして再生させたいと、平成二十年に商店街の有志や地域住民などによって「神門通り甦りよみがえりの会」が結成され、また平成二十二年からは市や県の行政による安心して楽しみながら歩ける道とするための道路幅の見直し、石畳化、電線の地中化、景観条例の制定、統一感のある沿道の街並みの景観づくりなどの再生事業の取り組みが始まりました。この事業は地域住民も参加して進められ、平成二十二年七月からワークショップが複数回開催されました。

こうした「平成の遷宮」に合わせた一連の官民一体の取り組みの成果が上がり、出雲大社への表参道として元の神門通りの賑わいが戻ってきて、参拝客の増加につながってきました。

その間、私もシャッター状態だった神門通りの実家を開放し、平成二十二年から四〇五年間、「おも

てなし処 福屋」という手作りの看板を立てて、みち行く観光客にお茶の接待をして出雲大社のお話をしておもてなしをしました。また「神門通り甦りよみがえりの会」にも所属し、会員の一人として伊勢神宮や鳥取県鹿野町などいくつかの先進地視察にも同行したり、再生事業のワークショップにも参画し、この変遷を肌で感じてきました。

この再生事業は今なお継続中で、現在、宇迦橋の架け替え工事、また国指定重要文化財である旧大社駅の保存修理も工事中です。更に素晴らしい魅力ある門前町になることを期待しています。

二 観光客の増加

〽参拝方法あれこれ〽

「平成の大遷宮」と神門通りの再生事業



が功を奏して、店舗の数も平成十八年の二十二軒から次々と町外からの出店者が増えて、令和四年には八十軒、全国的な神社ブームや県立古代出雲歴史博物館の設立も相まって、観光客は平成二十三年の二百万人台から平成二十五年のピーク時には八百四十万人にも達しました。

確かに二年前からのコロナ感染拡大が観光に与える影響は大きいのですが、感染が比較的落ち着いてきた昨年のゴールデンウィーク、第六波前の十一月の神在祭ごろの人の多さは驚きでした。

大国主大神は、男女のご縁だけでなく、人々を取り巻くありとあらゆる繋がりのご縁を結んで下さる神様として、今だとはかりご縁を求めて老若男女たくさんの方の参りで賑わっていました。

鳥居の前でのお辞儀、下り参道にある神社参拝の長蛇の列や素鷲の社で稲佐の浜から戴いたお砂の交換など行儀のよい参拝方法やマナーの良さが、地元の人々とは随分変わって戸惑うばかりです。これはテレビ、インターネット、SNSなどのメディアの影響が大きいのかなと思います。

三 稲佐の浜の変遷

〱 海水浴場から日が沈む聖地出雲へ〱

私たちの子供時代の稲佐の浜と言えば、

夏休みの海水浴場と灘祭でした。その頃は、沖の御前といわれる弁天さんはずーと沖合にあり、その近くは急に深くなっているののでその周りには遊泳禁止の旗が立っていました。しかし近年、潮の流れが変わって砂浜が広くなり、弁天さんは次第に岸に近づいてきて、遂に平成二十三年頃には砂浜に上がってきて様変わりしました。

海水浴をしている人はほとんど見なくなりましたが、「平成の大遷宮」や更に文化庁の「日本遺産」創設により、平成二十九年度に出雲市が「日が沈む聖地出雲」神が作り出した地の夕日を巡る」として認定されたことで、今では夕日スポットとして、また、全国の八百万神が参集される浜であることから、出雲大社の新しい玄関口としてたくさんの方の観光客で賑わうようになっていきます。

今現在、増加する観光客の対応も見据えて、弁天さん前に夕日のビュースポット、休憩所や駐車場も完備した海浜公園を実現すべく県事業として工事中です。

四 変わらないものを大切に

母校の校歌にもあるように宇迦山のおもとに鎮座する厳かな杵築の宮は、仰ぎながら学んだ私たちをいつの時代も変わること

なく見守って励ましてくれそうです。このように町の急激な変化の中にあっても、変わらないものを見つめながら地元で生活する者の一人として、ふるさとの良さを今後も発信し続けていきたいと思っています。



母校だより

大社高校野球部「希望の光」

「何のために野球をやるのか？」 昨年の春季大会で敗れた後、我々野球部は原点を見つめ直した。部員の大半が自分の夢を叶えるためという自己中心的な考えであった。当然の想いであり否定するつもりはないが、何か寂しく感じた。様々に議論を交わすうちに、皆の考えが「自分のため」から「誰かのため」に変化していった。

本校野球部は昨年120周年を迎えた。120年間、選手であったOBの方々は勿論、その家族・親戚、学校関係者そしていなさ会の方々なども含めると数え切れない方々が関わり、本校野球部の誇りを胸に熱い想いを共有してきた。我々は現在その一ページとして野球をさせていただいている。部員はそのことに気づき想いを新たにした。「何のために野球をやるのか？」「様々な人々の希望の光となる！」我々



の野球を見て一人でも多くの方に喜んでもらいたい。甲子園に出場し、全国のいなさ会の方に元気を届けたい。そのような想いで夏の大会に臨んだが、残念ながら決勝で敗れた。

甲子園から遠ざかること三十年。今年こそは部員全員の想いを成就させ、皆様と一緒に喜びを分かち合い、大社高校を盛り上げたいと思います。野球部一同日々精進して参りますので、これからも宜しく願います。

野球部 監督 石飛 文太（高校五十二期）

2022年 3月記

大社高校サッカー部

私たちサッカー部はサッカーに関わる全ての人を幸せにしたいという大目的を持ち、結果目標を『全国優勝』に設定し、日々練習に励んでいます。大目的に迫り、結果目標を達成するために四項目に細分化したテーマを日々意識して練習しています。

① 常に新記録を出す（インターハイベスト8、高校選手権三回戦進出、プリンスリーグ中国三位を超える）

② プロの輩出（今年度久しぶりにJリーガー「吉井佑将・カマタマーレ讃岐」が誕生しました。本気でプロを目指す選手が増えていきます）

③ 指導者・審判の輩出（サッカー文化を支え、醸成させる必要不可欠な存在の輩出）

④ 学校生活の充実（勉学に励み、豊かな人生を歩む資質能力を高める）

この四項目をベースに大目的、結果目標に迫る日々を送り、諸先輩方に負けぬような伝統の一ページを毎年毎年積み上げられるように頑張ります。

令和三年度主な成績

● 島根県高校新人サッカー大会 優勝

● 島根県高校総体 準優勝

● 島根県高校サッカー選手権大会 優勝
（二年連続）

● 第100回全国高校サッカー選手権大会 出場

● 高円宮杯JFA U-18サッカープリンス

リーグ中国2022 参入決定

● 中国高校新人サッカー大会 出場

2022年 3月記



会 務 報 告

事務局長 糸賀耕一（高校十九期）

令和三年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症に翻弄されました。

令和三年度第三十四回総会は、サンラポーむらぐもにて、錦秋の十月三十日に行なうはずが叶わず、役員会で協議の結果、甚だ残念なことでありましたが安全を第一に考慮してやむなく中止という苦渋の決定をしました。

なお、総会中止のお知らせに記しましたが、総会で審議予定だった前年度の事業報告・決算報告、本年度の事業計画・予算案審議は、役員会での承認を以て総会の承認とさせていただきます。御承知おき下さい。

令和三年度の事業

- ▼令和三年五月二日 会計監査
- ▼令和三年六月二十日 会報編集委員会
- ▼令和三年八月二十四日 正副会長・事務局長会
- ▼令和三年八月二十八日 第一回役員会
- 前年度の事業報告・決算報告、本年度の事業計画・予算案承認。
- ▼令和三年八月三十日 総会中止のお知らせ、会費納入お願い、会報を送。
- ▼令和三年十二月四日 会報編集委員会同日 開催予定だった第二回役員会は、新型コロナウイルス感染症終息が見込めないため中止。
- ▼令和四年三月五日 第三回役員会
- 会計中間報告。来年度の総会打ち合わせ。
- 同日 会報編集委員会

令和3年度松江いなさ会決算書

収入総額	501,413 円
支出総額	208,114 円
差引金額	293,299 円

1. 収入の部

単位：円

項目	本年度予算額	本年度決算額	増減	摘要
会費	200,000	186,000	▲14,000	@2,000×93名
寄付金	65,000	50,000	▲15,000	いなさ会
雑収入	588	1	▲587	普通預金利息
繰越金	265,412	265,412	0	
合計	531,000	501,413	▲29,587	

2. 支出の部

単位：円

項目	本年度予算額	本年度決算額	増減	摘要
会議費	30,000	20,945	▲9,055	役員会、役員会会場費等
事務費	30,000	11,000	▲19,000	通信費、事務用品、消耗品等
事業費	350,000	139,610	▲210,390	会報発行費、取材費、総会中止連絡・会費納入願い郵券等
慶弔費	20,000	20,000	0	中筋紀行氏香典、前島道信氏香典
雑費	30,000	16,559	▲13,441	振込手数料等
予備費	71,000	0	▲71,000	
合計	531,000	208,114	▲322,886	

基金積立金現在額 200,000円

令和4年度松江いなさ会予算(案)

1. 収入の部

単位：円

項目	前年度予算額	本年度予算額	増減	摘要
会費	200,000	200,000	0	@2,000×100名
寄付金	65,000	60,000	▲5,000	
雑収入	588	701	113	預金利息等
繰越金	265,412	293,299	27,887	
合計	531,000	554,000	23,000	

2. 支出の部

単位：円

項目	前年度予算額	本年度予算額	増減	摘要
会議費	30,000	30,000	0	幹事会、役員会、事務局費等
事務費	30,000	40,000	10,000	通信費、事務用品、消耗品等
事業費	350,000	350,000	0	総会、会報発行費等
慶弔費	20,000	20,000	0	
雑費	30,000	30,000	0	振込手数料等
予備費	71,000	84,000	13,000	
合計	531,000	554,000	23,000	

基金積立金現在額 200,000円

令和4年度の総会は 中止と致しました

今年度の総会 御案内

日時 十月二十九日(土)

総会 午後一時から。

記念講演 午後二時から。

懇親会 午後三時から。

懇親会会費 五千円。

会場 サンラボーむらくも(松江市殿町)

記念講演 講師と演題

梶谷 光弘氏

(公益財団法人いづも財団事務局次長)

「華岡青洲の真実」

講師紹介

一九五二年 大社町生まれ。

一九七五年 島根大学教育学部卒業。

二〇一三年三月まで 公立小中学校、島根大学教育学部附属中学校、島根県教育庁勤務。

その後、兵庫教育大学大学院修了。

その後、島根大学特任教授を経て現職。

著書

『華岡流医療の世界』『松江藩校の変遷と役割』

『西洋医学受容から衛生思想普及までの道のり』『漢学と医学』など多数。

講師からのコメント

「江戸時代の医者」と言えば、多くの人が「華岡青洲」の名前を挙げるでしょう。その理由は、

有吉佐和子が昭和四一(一九六六)年に発表した小説『華岡青洲の妻』の影響です。これにより、それまでは一部の研究者しか知らなかった彼は、一般の人にも知られるようになりました。同時に、そこに描かれた内容はすべて真実として受け取られました。

しかし、この小説には有吉佐和子が考えた創作(フィクション)が随所に散りばめられています。その最たるものは、彼が世界で初めて全身麻酔薬を使って乳がん腫瘍摘出手術に成功したのは文化二(一八〇五)年十月十三日ではなく、一年前の文化元年だったことです。

以下は講演でお話させていただきます。

華岡青洲に学んだ

出雲国の医者・西山砂保

華岡青洲に学んだ医者が江戸時代の出雲国にいました。西山砂保です。

一七八一(天明元) 出雲国神門郡萩原村(現・出雲市萩原町)で誕生。

一八〇〇(寛政一二) 杵築町の千家俊信(梅廻舎)に国学や医学などを学ぶ。

一八〇四(文化元) 華岡青洲、世界で初めて全身麻酔外科手術に成功。

一八一(文化八) 紀伊国に赴き、華岡青洲の門人となる。その後、出雲で開業。

一八二五(文政八) 長崎に赴き、シーボルトからオランダ医学を学ぶ。

一八三九(天保一〇) 逝去。

華岡青洲に乳がんの治療法を学んだ西山砂保は、地方における最新医学の権威者になり、多くの患者を救います。江戸時代末期の文政年間(一八一八〜三〇)頃に作られた出雲国に「国益をもたらししたものを番付にした『雲陽国益鑑』」

(松江歴史館展示)には、「西山須南保」の名前があり、彼がいかに多くの国益をもたらした名医であったかを表しています。

参考文献『日本の近代化に貢献した出雲人』

二〇一四年三月発行 松江歴史館編集

皆様へお願い

松江いなさ会は、皆様からお納めいただく会費で運営しており、御協力いただいておりますことに、厚く御礼申し上げます。

結成から四十年近く、松江いなさ会の絆をさらに発展させて行きたいと思っております。

つきましては、年会費は二〇〇〇円、納入期限は一応、十二月末日でございます。

昨年度は前年度より十名も多くの方から会費を納入いただき厚く御礼申し上げます。

しかし、会報七面掲載の決算書でもお分かりいただけと思いますが、諸経費の高騰もあり、会計事情は極めて厳しくなっています。事情ご賢察の上、一人でも多くの方からの会費納入を宜しくお願い致します。

編集後記

ウクライナへのロシアの侵略戦争、いつ収束するとも分らない新型コロナウイルスの中で私たちはいま歴史に残る大変な時代を生きている気がします。松江いなさ会の会員の皆様のご健康を祈りつつ会報第三十三号をお送りします。

今岡克己(高校二十四期)